

話題52 龔尚中（カン・サンジュン）を読む ～我悩む、ゆえに我有り～

テレビ・新聞・雑誌等で幅広く活躍する龔尚中氏の現代日本史のとらえ方に興味をいだき、講話集「明日への希望」を手に入れた。日本による植民地時代を経験した韓国人の両親のもとに生まれ、差別意識のはびこる日本の社会の中で育ち、そして孤独感にさいなまれる青春時代の格闘が、日本人としての「永野鉄雄」から「龔尚中」として生きる決意を生み出した。

韓国を植民地化した日本人の差別意識とその社会の中で、日本人に成りきることの出来ないその苦悩は、人間・龔尚中の生きる意欲を負う方向へ導くのではなく、かえって悩みつつも生き続けることの意義を見いだす「力」となしている。

夏目漱石の作品・その思想との出会いが、国籍に捕らわれない人間・龔尚中を育み、戦後の日本の歴史の中に、現代社会の位置づけを行い、評価し、そして普遍性を衣にした未来を求めて生きる方向性を見いだしている。

龔尚中氏が、熊本の地ではなく沖縄の社会で生まれ育っていたならば、どのような生き方を見つけたであろうか。龔氏の母親は、16歳で全く日本語を知らない状態で来日し、沖縄の習慣と同様に太陰暦を背景に生活を営んでいる。父親は、地道な生き方の中で、「差別」を受ける側の重圧に耐えつつ、隣人であるハンセン病患者の思いに共感し、「おもいやり」の姿勢を示している。

「差別」。戦前・戦後の沖縄の歴史から推測すると、やはり「差別」意識は、日本の社会の中の根底に潜んでいるものと推測できる。しかも、どっしりと。日本本土を守るための防波堤としての位置づけであり、捨て石でもあった。

沖縄には、山之口漠の「喪のある景色」がある。親の親、子の子。連綿と続く縦の線。素朴な沖縄の祖先崇拜は、この縦の線の重みを語り伝えている。加えて、横の線、「イチャリバ・チョウデー（皆が兄弟姉妹である）」の風土がある。人と人、人と自然、そして社会との関わりの中で、生きる意欲を引き出す横の線。長い縦の線と交わる横の線が十字架の接点をなし、背負って生きる「力」となる。

個人的には、大学入学は本土復帰前のパスポートでの国内留学であった。大学紛争を経験した最後の世代である。研修医時代に岡山の地で「部落」の診療所の勤務を経験した。そこで、人を差別してはいけないことを学んだ。医師不足の沖縄で、ハンセン病療養所沖縄愛楽園での患者さんとの出会いがあった。「差別」は、あつてはならないことを学んだ。

龔尚中氏の語る「憐れ」。沖縄の方言での「ちむぐる（肝心）」に相通ずるのものがあるのではないかと考える。重い十字架とその重みをかみしめながら、耐えて「生き続ける」ところにものの「憐れ」、生きることの意味を見いだしている。「我悩む、ゆえに我有り」と。

情読雨読

石川 清司

テレビ・新聞・雑誌などで幅広く活躍する姜尚中氏かえって悩みつつも生き続の現代日本史のとらえ方に興味を抱き、講話集「明日への希望」を手に入れた。

夏目漱石の作品とその思想との出会いが、国籍に捕らわれない人間・姜尚中を育み、戦後の日本の歴史のこる日本の社会の中で育中に、現代社会を位置付け

悩みつつも生きる意義

ち、そして孤独感にさいなまれる青春時代の格闘が、日本人としての「永野鉄雄」から「姜尚中」として

韓国の植民地化した日本人の差別意識とその社会の中で、日本人に成りきることのできない苦悩は、人間・姜尚中の生きる意欲を負

慣と同様に大陸を背景に生活を送っている。父親は、地道な生き方の中で、「差別」をまける側の重圧に耐えつつ、隣人であるハンセン病患者の思いに共感し、「おもしろい」の姿勢を示している。

「差別」。戦前・戦後の沖繩の歴史から推測すると、やはり「差別」意識は、日本の社会の中の根底に潜んでいるものと推測できる。しかも、どつしりと、日本本土を守るための

防波堤としての位置づけであり、捨て置でもあった。沖繩出身の詩人山之口鏡の「喪のある景色」がある。

親の親、子の子。連綿と続く縦の線。素朴な沖繩の祖先崇拜は、この縦の線の重みを語り伝えている。加えて横の線「イチャリバ・チョウデー」(皆が兄弟姉妹であることの意味を見い出している。「我悩む、ゆえに我有り」と。

姜尚中著 講和集 明日への希望



いしかわ・きよし 1948年本部町生まれ。岡山大学医学部卒。呼吸器外科専攻。国立病院機構沖繩病院院長退任後、介護老人保健施設「あけみおの里」施設長。著書に「つたえてください 小指奮闘記」「医者を目で見た患者さん」など。

個人的には、本土復帰前にパスポートを持って本土の大学に入学した。国内留学であった。研修医時代に岡山の地で「被差別部落」の診療所の勤務を経験し、人を差別してはいけないことを学んだ。医師不足の沖繩で、ハンセン病療養所沖繩愛楽園での患者さんとの出会いがあった。「差別」は、あつてはならないことを学んだ。

被差別部落の語る「憐れ」。沖繩の方言での「ちむぐる(肝心)」に相通するものがあるのではないかと考える。重い十字架の重みをかみしめながら、耐えて「生き続ける」ところにもの「憐れ」、生きる

(ユーキャン・CD集含めて2万9千円)